

お釈迦さまの「遺言」

お釈迦さまは北インドのクシナガラの大きな沙羅の木の下で、静かに八〇歳の生涯を閉じられました。その今わのときの「説法が『大智度論』という書物に伝えられています。

「涅槃に入りなんとせしどき、もろもろの比丘（ビク・行者）に語りたまわく」。

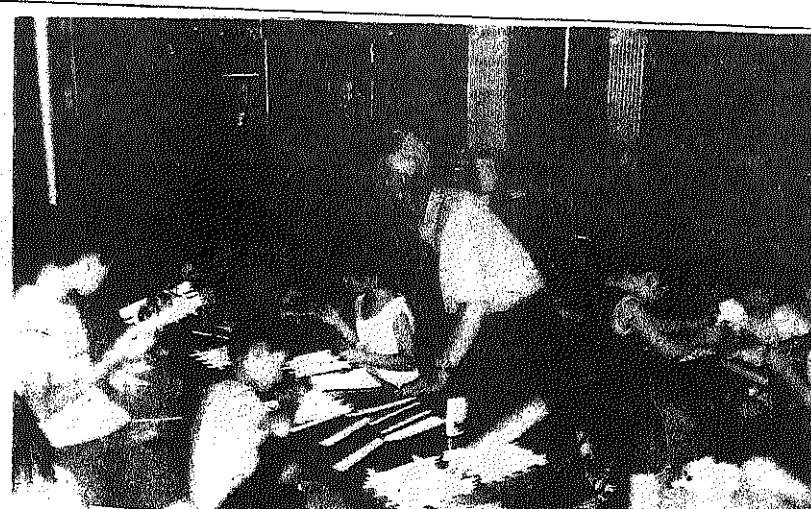
これからだれを頼りに生きて行けばいいのかと嘆き悲しむ人々にたいして、お釈迦さまは四つの戒め四つのより所をお示しになるのです。

まず、今日からは、「法」をよりどころに生きなさい。「人」を当てたよりにしてはなりません。「法によりて人に抛らざるべし」

次は「〈義〉に依りて〈語〉に抛らざるべし」。いろいろな言説がある。うわべの言葉に迷わされないでことの意義をしっかりと見定めましょう。

そして、「〈智〉によりて〈識〉に抛らざるべし」。あれこれ分別くさい知識にまどわされずに、慈悲のところにみちた智慧に導かれましょう。

最後は「〈了義経〉によりて〈不了義経〉に拠るなかれ。ほとけさまのまことが説いてある本当の仏教を信じ、誤った宗教に惑わされないように。



8月19日勝林寺こども研修会（仏婦主催）
給代さん・仏婦のおかあさんに指導されて
工作に懸命なこどもたち



これは二千年前の「説法ではないように思えます。
「法」によりて人によらざるべし」

「（法）というものはインドのことばで「涅槃」（般若波羅蜜）でもあります。いつでも、どこでも、だれにでも通用する真実の教えです。しかし今のこのわたし達は、不变の真理は何かと考える前に、あの人があなたからこの人がこう説いているからと世間の評判や風潮に翻弄されているではありませんまい。

「（義）によりて（語）によらざるべし」。

最近こんなことがありました。全く勝手気ままなお經の解釈から、お釈迦さまの宗教を大っぴらに誹謗非難したある宗の僧侶がいました。あのテロリストたちはアッラーの教えを本当に正しく受け取っているのでしょうか。まさに自分勝手に不了義、間違った利己的な解釈のなかで受け取っているのではないですか。

最後に「（了義経）によりて（不了義経）によらざれ」

「（智）慧によつて知（識）によらざるべし」。あれこの知識分別に左右されないで、いつもだれにでも、思いやりのところで共に生きて行く智慧の心を持ちましょう。

最近こんなことがありました。全く勝手気ままなお經の解釈から、お釈迦さまの宗教を大っぴらに誹謗非難したある宗の僧侶がいました。あのテロリストたちはアッラーの教えを本当に正しく受け取っているのでしょうか。まさに自分勝手に不了義、間違った利己的な解釈のなかで受け取っているのではないですか。

こう考えてみると、このお釈迦様最後のご説法はほかでもない今のこの私への警告であるように思います。

戦争といふことについてみても今の世界にはいろいろな意見や見解があります。いろんな動きや策動もあります。

それら他人の学説・見解・言論よりも、まず戦争の現実に目を向けましょう。

戦争の現実とは、戦争が起これば、女も子供も殺されると言うことです。（自灯明）この現実をしっかりと認識したうえで、あの人の、その言葉が真実なのか、いつでも・どちらにでも・だれにでも通用する法（おしえ）（法燈明）なのかも判断しなさいとお釈迦さまは教えてくださっているのです。

| 九月 | 長月 | のこよみ |
|---------|-------------|---------------|
| 一日 | 京都 | 蓮華会総会・講演会（神戸） |
| 二日 | 高福寺前住前々住法事 | |
| 三日 | 小P.T.A.廃品回収 | |
| 四日 | 山田弘之氏宅法事 | |
| 五日 | 朗読あすなろ活動日 | |
| 六日 | 高校祭り→八日 | |
| 七日 | 京都 | 「連研」研究会 |
| 八日 | 京都 | 総代研修会 |
| 九日 | 京都 | 山田まつみ様忌明け |
| 十日 | 京都 | 総局教区巡回（神戸） |
| 十一日 | 京都 | 但馬障害者運動会 |
| 十二日 | 京都 | 次男氏宅法事 |
| 十三日 | 京都 | 常任委員会 |
| 十四日 | 京都 | 坪木敬老の日 |
| 十五日 | 京都 | 湯口睦氏宅法事 |
| 十六日 | 京都 | 合同沿岸会 |
| 十七日 | 京都 | 秋彼岸会 |
| 十八日 | 京都 | 敏明氏宅法事 |
| 十九日 | 京都 | 「連研」（光顕寺） |
| 二十日 | 京都 | ワニライフ竹野キャンプ |
| 二十一日 | 京都 | みのりを聞く会 |
| 二十二日 | 京都 | 朗読あすなろ活動日 |
| 二十三日 | 京都 | |
| 二十四日 | 京都 | |
| 二十五日 | 京都 | |
| 二十六日 | 京都 | |
| 二十七日 | 京都 | |
| 二十八日 | 京都 | |
| 二十九日 | 京都 | |
| 三十日 | 京都 | |
| 一一日 | 京都 | |
| 一二日 | 京都 | |
| 一二三日 | 京都 | |
| 一二四日 | 京都 | |
| 一二五日 | 京都 | |
| 一二六日 | 京都 | |
| 一二七日 | 京都 | |
| 一二八日 | 京都 | |
| 一二九日 | 京都 | |
| 一二〇日 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五 | 京都 | |
| 一二六 | 京都 | |
| 一二七 | 京都 | |
| 一二八 | 京都 | |
| 一二九 | 京都 | |
| 一二〇 | 京都 | |
| 一二一 | 京都 | |
| 一二二 | 京都 | |
| 一二三 | 京都 | |
| 一二四 | 京都 | |
| 一二五</td | | |

竹の盆



「まいにち日常的にお参りできる身近なお墓がいい」という訳で、ずっとずっと遠い町外れの丘の上にあつた以前の墓地を廃して、家の敷地のなかに立派な総合墓を立ててくれたのはおやじで、もう三十年にもなります。たしかにお盆がきても便利で、日々庭掃除感覚で墓のお守りも出来ます。

ところが妙なもので、最近、やっぱり、歳のせいの懐古趣味というのでしょうか、特に墓と言うのは、便利よりも懐かしさがいいんだと感じるようになりました。

昔は、ホレ、お盆やご命日の一週間も前からお花立の竹筒、線香立ての竹のワッカ等を、裏の竹やぶに行つておやじ汗水たらして作るのです。当日、それらを荒縄でいわえ、お花やお水と、自家製の竹箒をも一緒に遠くの山墓まで運ぶのでした。その苦労からすると、いまは全く便利。花立も線香立てもみんな付いているし、落ち葉も雑草もなにもなく掃除の手間もなにもいらない。

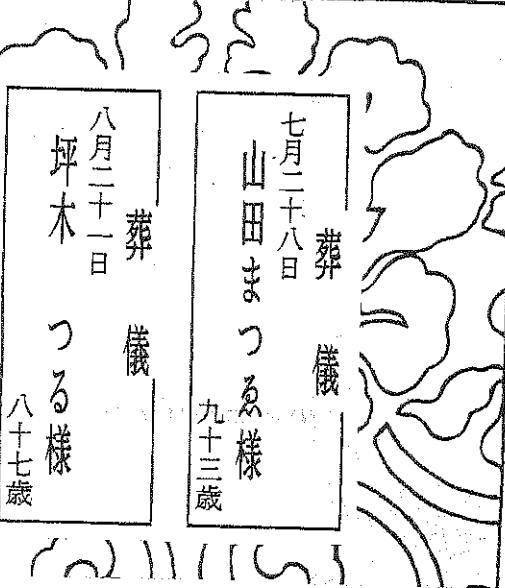
でもなんだかあまりにも本意ない。

「便利」が「こころ」を食べてしまったのではないか。「理屈」が「自然」を滅ぼしてしまったのではないか。そんなことをついつい思って、ついでにふと考えた事があります。

「竹」がなくなってしまった。

いつの間にか、わが家の裏山の竹藪もなくなつて、そこは機織り工場になってしまつている。竹の花筒も竹のワッカも、たけ箒も、竹籠も竹ミニも、山から水引く竹のトユもいつのまにか消えてしまつてある。暮らしの中から竹が消えてしまつたのはいつからなんだろう。これは、大変な事ではないか。

そう思つてみると、昨年の台風23号の災害のおお本は、ここにあるのではないかとも思つてくる。



昔は、どこの川べりにも竹藪があつた。子供が川で水浴びするとき、その川縁の竹藪の中で服を脱いだものだ。川縁の竹藪で出来た川のウロのなは、鰻や鮎や川魚の豊かな住家だつた。第一竹の根が洪水のとき川岸をしつかりと固め守つていたに違いない。現に昨年の台風で決壊したあの場所は、竹藪を奇麗に伐採してしまつた場所。竹やぶがなくなつた。川にも、山にも、家回りにも。竹やぶがなくなつた。

かたに去年の台風で決壊したあの場所は、竹藪で守つていたに違いない。岸をしつかりと固め守つていたに違いない。竹やぶがなくなつた。竹やぶがなくなつた。川にも、山にも、家回りにも。竹やぶがなくなつた。

(法要で仏前にお供えした文章)
表文
白文
本日茲に
戦没者追悼盂蘭盆会法要を勤修するに當たり
大慈大悲阿弥陀仏の尊前を莊嚴し
全戦争犠牲者・遺族共どもに
温故知新
戦い敗れて六〇年
いまに至つては
戦争の風化も言われ 戦争の評価もまちまち
しかしたとえ
あの戦争の記憶は薄れようとも
たとえ戦争の動機を肯定しようとも
戦争の中では幾千万人の命が無残にも失われた事実だけは消すことは出来ません。
しかもその戦争犠牲者のなかには
戦争行為に参加した人のみなならず、女性・
事実だけは消すことは出来ません。

敗戦六〇年。
「戦争放棄」という声よりも「愛国心を」という声が高く呼ばれています。
正義のための戦いと称した戦争が泥沼化した状態で続けられつつあります。
また国内では

戦い敗れて六〇年
いまに至つては
戦争の風化も言われ 戦争の評価もまちまち
しかしたとえ
あの戦争の記憶は薄れようとも
たとえ戦争の動機を肯定しようとも
戦争の中では幾千万人の命が無残にも失われた事実だけは消すことは出来ません。
しかもその戦争犠牲者のなかには
戦争行為に参加した人のみなならず、女性・
事実だけは消すことは出来ません。

六〇年前のあの無残な現実・悲惨な事実を想起し起こし、その現実認識に立つて将来に向かって
強く
平和を願わなければなりません。

「殺すなれ」は、仏の教えの第一の戒め
設我得仏十方衆生

いつでも。どこでも。だれでも。わが子と
強く
平和を願わなければなりません。

このように戦争と言つうものは
正義の戦いであろうが
聖なるいくさであろうが
意味方であろうが敵対者であろうが

そんな区別なく
人の命を

否応無く奪い去るものであります。

この現実を何にもましして厳粛に認識すべきであります。

敗戦六〇年経過した今

国際的にはまたまた

正義のための戦いと称した戦争が泥沼化した状態で続けられつつあります。

また国内では

「戦争放棄」という声よりも「愛国心を」という声が高く呼ばれています。

敗戦六〇年。

六〇年前のあの無残な現実・悲惨な事実を想起し起こし、その現実認識に立つて

将来に向かって
強く
平和を願わなければなりません。

「殺すなれ」は、仏の教えの第一の戒め
設我得仏十方衆生

いつでも。どこでも。だれでも。わが子と

強く
平和を願わなければなりません。

このように戦争と言つうものは
正義の戦いであろうが
聖なるいくさであろうが
意味方であろうが敵対者であろうが

願わくは

本日この追悼会に参詣の念仏の衆生を

隣閥愛護したま

呼んでくださる 阿弥陀如来さま

世の中安穏なれと擁護したまわんことを

敬つて

申し上げます。